F2-46

青梅市内の多摩川に関わる呼び名に関する基礎的研究

A Basic Study on the Common Name of Tama River in Ome City

○宮澤祐子[1]，阿部貴弘[2]，天野光一[2]
*Yuko Miyazawa[1], Takahiro Abe[2], Koichi Amano[2]

Abstract: In order to use a river appropriately, it is important to know the feature of the river. Also, nicknames given to the river and surroundings are useful to understand the feature of the river. Therefore, in this study, using historical materials, the origin of nicknames of Tama River in Ome City has been analyzed to understand the feature of Tama River.

１．はじめに

東京都青梅市を流れる多摩川沿いの地域には,「○○淵」,「○○河原」,「○○岩」など，多摩川及び多摩川沿いの地形地物に多くの呼び名が付けられている．かつては筏流しや渡し船，あるいは子供の川遊びなど盛んに利用されていた多摩川であるが，交通機関の発達や橋梁の架橋などにより，かつてほど利用がなされておらず，それに伴いかつての呼び名も受け継がれず，忘れ去られてしまっているものもある．

そこで本研究は，多摩川の魅力向上に資するべく，多摩川に関わる呼び名を抽出し，その由来や呼称者との関係を分析することで，人々と多摩川との関わりや場所の意味を明らかにすることを目的とする．

２．研究対象

本研究では，青梅市内における多摩川全域を対象とする．また，青梅市都市計画マスタープランの「多摩川沿い地域の整備方針」に基づき，市内の多摩川を **Figure 1** のように上流域，中流域，下流域にわけて分析を行う．

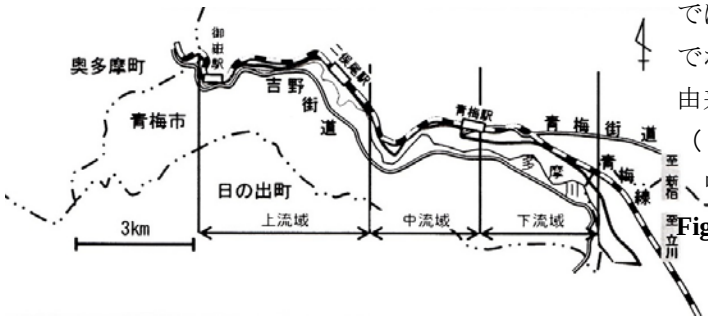

Figure 1. Ome outline

３．研究方法

（１） 文献調査

文献調査では岩澤一徳著「青梅市内の多摩川の利用変遷に関する基礎的研究」[1]，根岸律男著「多摩川物語」[2]，青梅市郷土博物館編「皇国地誌・西多摩郡村誌（上・下）」[3]，青梅市郷土博物館編「青梅郷土誌」[4]，福島和夫著「高野近太郎翁の聞き書き」[5]から，かつての呼び名やその由来などを抽出する．

（２）現地調査

現地調査では，呼び名のついている場所の現状を把握する．

（３）ヒアリング調査

ヒアリング調査では，現在の河川利用者や地域の古老から，呼び名に係る情報を収集するとともに，呼び名の付いている場所の現在の利用の仕方等についても情報収集する．

４．調査結果

本稿では，中流域における調査結果を示す．中流域では多摩川に関わる呼び名は 35 件確認された．由来までわかる呼び名は 35 件中 26 件で，これらを対象物，由来，呼称者の視点から分類した．

（１）対象物

中流域における呼び名の対象物を分類したものを **Figure 2** に示す．

１：日大理工・学部・まち　２：日大理工・教員・まち

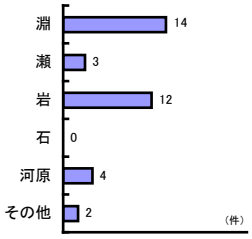

Figure 2. Object of nickname　**Figure 3.**JIZOFUCH

（２）由来

呼び名の由来を分類したものを **Figure 4** に示す.

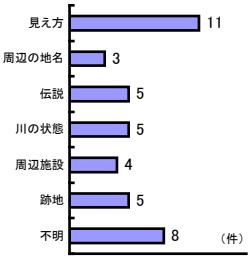

Figure 4. Origin of the nickname　**Figure 5.**EBOSHIIWA（一部重複あり）

（３）呼称者

Figure 2 の対象物における呼称者を **Figure 6** に示す.

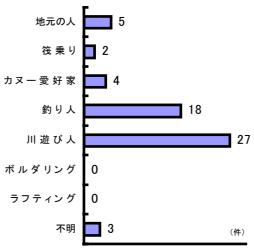

Figure 6. Designation person　**Figure 7.**TONNERUIWA（一部重複あり）

５．考察

呼び名の対象物別でみると, 淵に対する呼び名が多く存在しており, 淵の呼び名の由来は様々で不明なものが多い. 淵の呼び名を呼称者別にみると［川遊び人］と［釣り人］が多く, それらの呼称者は“泳ぐ場所”や“飛び込みの場所”として利用されている. 呼び名のある淵は河原から直接アクセスできる立地にあるものが多い. 一方で川底で渦を巻く釜の淵のように川遊び人にとって危険を示している淵の呼び名もある.

次に対象物で多い岩の呼び名の由来は「見え方」が多い. 岩の呼び名の呼称者別にみると,［川遊び人］と［釣り人］が多く, それらの呼称者は岩を“目印”や飛び込みの“遊び場”として呼んでいる.

瀬の呼び名の由来は,「川の状態」が多く, 呼び名のある瀬は徒歩で直接アクセス出来ない場所に立地している. それらの呼称者は［カヌー愛好家］であり,“危険な場所”を示している. 例えば, テトラポットが散在しておりカヌーがひっくり返ってしまいやすいテトラの瀬などがある.

呼び名の由来別にみると, 亀の形をした亀岩や大きさの大きい百岩など特徴的な岩の形態を示したものが多い.「川の状態」では, 流れが渦を巻いているまわり淵など淵や瀬を対象とした危険を知らせる内容が多く, それらは［川遊び人］や［釣り人］,［カヌー愛好家］など河川利用者から呼ばれている.

呼び名の呼称者別にみると,［川遊び人］と［釣り人］が多く, 遊び場およびその周辺の淵, 岩, 河原に呼び名を付けている. 加えて遊ぶ上で危険を示す呼び名も多い. 川遊び人はそれらを泳ぐ, 飛び込み, バーベキューをするにあたり対象物に呼び名を付け“集合場所”として利用しており, 釣り人は釣り場の“目印”として呼んでおり, カヌー愛好家は川の状態を知るための“目印”として呼び名を利用している.［地元の人］は「伝説」や「周辺地名」のついた河原などを呼称している.

６．まとめ

比較的一般の利用者の多い中流域では, 川遊び人, 釣り人が呼称者となっているものが多く, 由来が場所を示す呼び名, 岩や淵など見た目, 地名の目印を示すための呼び名が多い. 一方, 川の状態を表す呼び名は, カヌー愛好家が川の流れを楽しむあるいは川の流れの危険を知らせるために名付けされているものに限られている. また, 地元の人の間では, 伝説や地名を呼び名の由来にした淵や河原を呼称しているものが多い.

７．今後の課題

今後は, 上流域及び下流域の調査を進めるとともに, 中流域においてもヒアリング調査を拡充し, 呼び名の把握・分析を進める必要がある.

８．参考文献

[1] 岩澤一徳 :「青梅市内の多摩川の利用変遷に関する基礎的研究」, 日本大学理工学部社会交通工学科, 2015
[2] 根岸律男 :「多摩川物語」, 山崎利行, 1984
[3] 青梅市郷土博物館 :「皇国地誌・西多摩郡村誌（上・下）」, 青梅市教育委員会, 2010, 2011
[4] 青梅市郷土博物館 :「青梅郷土誌」, 青梅市教育委員会, 1994
[5] 福島和夫 :「高野近太郎翁の聞き書き」, 福島和夫, 2014